

# おやすみロバ



通巻2号 2007年12月



## にこピン通信2

鶴峰 まや子

目に見えない、けものが吐く息のように、  
強い風が吹き荒れた五月。何もかも身悶えし  
ているようなので、私だつてじつともしてい  
られません。ふらふらとさまよい出てひよろ  
ひよろとあてどなく歩くほかなく、角を曲が  
るたび違う匂いを含んでうずまいている風  
や、突然やってくる雨に身も心もさらされて



いるのです。

雨にびしょぬれになって、開きなおるしかないまでぐしょぬれになって、こみあげてくる愉快な笑いは何なのでしよう。もしも私が小さな男の子だったなら、キャッキヤとどびあがり、水たまりでバッチャンバッチャンあばれて、泥水にほおずりするつもりです。ポコプクポコプクと、どこかの家のこわれた雨どいから流れ落ちる水が、水たまりをうがち、歌うような音を鳴らしています。

そこに、ひとりの男が立っていました。なで肩の肩をさらにガツクリと落として、灰色の背広がぬれています。大きな鈴かけの木のゆっさりとした枝の下で雨宿りでしょうか。いいえ。なぜなら、もう、そこには、大きな

鈴かけの木はありませんでした。男は今はずもない、白と灰色のまだら模様あの幹に、そつと触れていました。今もまだ、あたたかな木はだが、脈うっているかのようです。でも、もう、そこには、大きな幹も豊かな枝も、光をゆらす葉もありませんでした。そこにはいたいたしい切り口があり、生木を切った匂いがあり、弱々しいいまわの息を吐きながら切り株があるだけです。

この鈴かけの木が、このしょぼくれた背中の中年男には、暗い夜に見いだした一けんの家の灯でした。孤独に疲れとぼとぼとたどり着き、ほつと肩をなでおろすと、木は男にみえない扉をあけました。その扉はトンネルの入口でした。あつという間にトンネルをぬけ

た先は異国の街のプラタナスの並木でした。

教会の鐘が鳴っています。賛美歌の合唱も小さく聞こえます。荘厳なバラ色の夕焼けが、だんだんと海の底の青に沈んでいきます。「みつばち」という名の古本屋の方に階段をおりていきます。少年がすれ違いざまに手すりをお傘の先でカン、とならし、男に「○△※□：：」と言いました。扉はあいていて、店に入ると、ひんやりと静かです。奥の机で書きものをしている店主らしき女以外には誰もいないようです。ぶ厚い窓ガラスから見える夕暮れの景色はかすかにゆがんでいて、目に涙がたまっている時にみえるようににじんできます。

女が書きものの手を止めて顔を上げまし

た。めがねをなおしながら、「あなたの最も敬愛する作家は？」とたずねました。男は感電したように、思わず「ドストエフスキー……」と答えていました。女がうなづいて、何か言いかけた時、ギーっという音がして大きな扉が閉まりました。まっ暗になつてあつという間にまたトンネルを逆もどりして、気がつくともとの鈴かけの木にもたれて目が醒めるのです。しかし、何度もいうように、今、その木はありません。（おしまい）

雨があがりました。キィキィとひよ鳥が声を立てながらさくらの実をついばんでいます。

「表現」という言葉がふと落っこちてきた



さくらんぼのように、心の弦をポロンと鳴らしました。いつだったか、4人で飲んでいいかんじで夜もふけてきた時、詩だとか絵だとか音楽だとかの「表現」ということが話題になりました。私は、生きていくということ、充分にその人の表現となり得るのになぜそれ以上にもっと何かを「表現」しようとするのだろうかという疑問をずっと持っていたので、そのことを、言いました。「吉本隆明が、『二十五時の作業』という言葉でいったように、それは日常生活とは別のもう一つの世界を持つということだ。」という意味のことを言ってくれた人がいて、少し納得した気もしました。だけど自己顕示欲とかうぬぼれと紙一重なところがこわくて私はできるなら

「表現したい」なんて野心が、もしも自分のうちに眠っているなら死ぬまで目醒めてほしくないと思いました。

意識的に「表現」することに比べて、無意識で言っている言葉や、夢中な時の行動ほどの人間を雄弁に表してしまうことはありません。鳥が美しく歌うのもみかんの花が甘く香るのも意図して表現しているというより、ただ生きているだけなのではないだろうか。だったら、こんな悪臭をはなちながら、口汚い言葉ばかり吐いている私なんかふたをして土の中にかくして埋めたいくらいです。なにガラスビンに何か暗号めいたものを書いて川に流すように、見知らぬ誰かに届くことを妄想してあてのない手紙を書く。人間という



のはそうせずにはられない淋しさを抱いて生まれてくるのでしょうか。秘密というのは、自分だけで持っていたいと同時に誰かと共犯者のようにわけ合いたい。ひとのぼんのう百八つ。

一本の木を切るという、そのことに何のためらいや祈りや許しを請う気持ちが無かったら、ただ「効率的に処理」したのだったら、木が生きた一生とはともにすごした私たちの人生とは何なのでしょう。ある専門家はいいました。「この木はもともと武蔵野に自生していたものではありません。外来種ですから、武蔵野の自然を守るという点では切ってもよい木です」

私たちの環境を守り子供たちに良い環境を残

していく会の会員の人が言いました。「この木は美しいこのまちの景観ととても似合っています。緑の多いまちは私たちの誇りです。木を切らないで下さい」

「どちらでも私は違うと思います。いのちの問題です」

アホ子ちゃんは叫びました。叫んだつもりでしたが、声になったのかならなかったのか、誰も「そうだ!」とは言いませんでした。やっぱりアホ子はアホ子なのでしょうか。「かっかっかっ。カクメイの……」

「カクメイの、ポツポツポ、ポエム」  
思いがけない言葉がアホ子ちゃんの口からとび出しました。「革命のポエム」どこで小耳にはさんだのでしょうか。アホ子がその意味や

背景を理解しているとは思えません。チェ・ゲバラ、という、今はもういない人の言葉だそうです。彼らが山中でゲリラ戦をたたかっていた時ひとりの兵士がけがを負つてもう一歩も動けなくなりました。その兵士は「足手まといになるのでおれをおいて行ってくれ」と言いました。チェ・ゲバラは、「お前をつけて、一緒に行くのが革命のポエムだ」と言つたそうです。「カクメイのポエム」心の中でささやいてみるだけで感動がこみあげるほどです。たとえ、その木があることが不便だったり、何かの邪魔だったりしても、一緒にゆくのが革命のポエム…とアホ子は言っているのでしょうか。だけれどそのことばは空気の中に消えてゆき、だれの心にもとまりません

でした。

……「革命?」「革命のポエムだと?」  
ある時突然、こだまのように、その声は響きました。それは西荻窪の空の高いところから。ヒバリではありません。ききおぼえのある男の声でした。「な、なにー!おめえみたいなガキに何がわかる?!」あきらかに酔っぱらっています。ああなつかしい、もう何年になるでしょう。西荻の飲み屋で酔っぱらい、いつものように、酔っぱらい、そのまま、あの世にいつてしまったのは、彼が五十の誕生日を迎えたか迎える前だったか、十二月のことでした。やすらかに眠っていた男が、むつくと起きあがり、おこりながら前歯のないヒゲヅラで笑いました。「ぶざけろ」。

ちから彼は愛されていたなんていうとキレイゴトめいて、彼はグラスを投げつけおこるでしょう。悪態ついて、強がったり弱がったり、そして焼酎くさい立ちシオンを電柱に残し、さっさといつてしまいました。今も、同じ電柱に、よっぱらいや犬や猫が同じようにしみを残していくのでしょうか。

私が西荻の満月洞という店ですごしたのは1993年からのほんの数年でした。あのころ、今よりもつと空っぽで、ごう慢でしたが、みんなあなたかかったのでハツラツとしていました。私は恥しらずでしたが、だまっで見守つてくれました。毎日、鯛など魚を買いに行った「魚庄」のおぼちゃん、私のことをずっと「くりちゃん」と呼びました。

黙つていればルオーの描くキリストのよう  
でさえある彼は、いつも喜々として人から  
み、悪口を言ったり文句をつけていました。  
そして笑っていたかと思うと敏感にいきり  
ました。それらは、今思えば、まっとうな  
ことでした。そして昔の曲をきいてはポロポロと  
涙をこぼしました。彼の若いころのことは知  
りません。革命を信じていた、あるいは、そ  
のようなことに身を賭すことを心に誓つて  
たかもしれません。閉店の時間をすぎ、店  
のタオルなどを二槽式の洗濯機に入れ、水をた  
めていると、すぐ横のトイレにおしっこをし  
て来た彼は、扉ごしに、金子光晴の洗面器に  
しゃぼりしゃぼりの詩のことなんかを話して  
くれるのでした。西荻のまちを彼は愛し、ま

「くりちゃん、くりちゃん、これあげる、もつ  
つて」と言つては、若かったころ着ていた  
のだというすてきな洋服をたくさんくまし  
た。私はそれらをよく着ました。ほんとはつ  
るちゃんなんだけど。

休日に西荻に行こうとすると中央線は休日  
運転をしていて吉祥寺の次は荻窪まで止まり  
ません。アレー、気がついた時は、西荻駅を  
通過中。そんな時、私が胸に抱いている西荻  
は実在しないんじゃないかと不安になりま  
す。

チュチュピーチュチュピー。シジュウカラ  
が高らかにうたいます。さーつと風がふぎ、  
たくさんの水滴とえごの木の花がポトポ  
トポトポト降りました。白い花が雪のように

つもっている地面の近くには、楓や、いちよ  
うやあけびが、芽ぶいています。この春生ま  
れたいのちです。もしもひとさし指と親指で  
つまんだら簡単に抜けて、しおれて死んでし  
まうでしょう。無防備に葉っぱをパッチリと  
開いて、いきいきとおう歌しています。陽の  
光をあびて。

もうすぐ桑の実が黒く熟すでしょう。去年、  
野川のほとりの桑の木にのぼつて、たくさん  
とつてビニール袋に入れたふみあき（当時3  
才）は「ほら、こんなに、ぶどうとつたよ」  
と言いました。今年は桑の実だとわかつてく  
れるでしょうか。去年おいしそうにびわの実  
をおかわりしたふみあきは「おいしいね、こ  
の柿」と言いました。今年もまた「柿」と思っ

て食べるのでしょうか。秋、あんなにいつぱ  
い柿の木になった実をもいで食べたのに。

おひるのおかずが魚がでると、ふみあきは  
「このお魚、誰が釣ったの？」とききます。  
だれが釣ってきてくれたのか、悲しいけれど  
わかりません。「うーん、おばちゃんの友だ  
ちの知り合いのお父さんの弟の息子の人が  
釣ったんだよ」と苦しまぎれに答えると、ふ  
みちゃんは「ちがうよ、ふみがおおかみさん  
と一緒に釣ってきたんだよ。」と言いました。  
「そう、ありがとう、おいしいね」と言つて  
食べました。そう思つて食べると、お魚が急  
にいきいきとしてきて、ちゃんと海を泳いで  
いたことを思い出させます。

ある時、ようくと歩きながら、話しました。

私 「……おうちに帰つて、夕ごはん食

べたの？」

よう 「そう」

私 「お母さんがトントントントンって、  
にんじん切つたの？」

よう 「うん、そんで、おなべに入れてー、  
うはははは。おなべがポコポコポコッ  
ていったの」

私 「そう、そしたら？」

よう 「ようが『早く食べたいなあ』って言っ  
たの」

私 「そう、そしたら？」

よう 「お母さんが『早く食べたいねえ』っ  
て言つたの」

私 「そう」……

ようくんはくすくす笑いながら、顔がキラキ  
ラしていました。ブーンとみつばちがとんで  
いきました。きつとハリエンジュの花のひと  
つにもぐりこむでしょう。いいにおいがして  
います。道のずつと先の方を、おばあさんが  
ゆつくりと横切りました。こんな午後は、永  
遠につづくような気がしてきます。どこか遠  
い国のいなかの線路みちを、歩いている気分  
です。ゆらゆらとかげろう。（おしまい）

## 鉛温泉

滝川 やすを



鉛温泉というなんとも地味な名前の温泉宿に足を向けたのは、この秋口の旅で二度目だ。と言っても一度目は十数年前のことです。しかもその時は同じ流域の他の宿で数日を過ごした際に、退屈のぎに立ち寄った、という程度だった。だが思いがけずにその時の

「鉛」の印象が深く、こんどはぜひこの宿を目指して来てみたいと思ったのである。

鉛温泉というのは東北本線で行けば花巻の町から四十分ほどの山間やまあいに在る、いわゆる湯治場である。湯治場といえば僕は子供の頃には祖父母に連れられて、時々近在の湯宿に

泊まりに行っていた。そうした、僕にも馴染みのある場所は、土地の大人たちが農閑期のひとときを骨休めのために温泉宿の一隅を借り、自前で簡素な食事を作りながらだらだらと過ごす所であった。

それから見れば、花巻の鉛温泉はかなり立派だ。しかもどこか大正ロマンなどという言葉を使いたくなってしまうような、一種の和洋折衷とでもいうのか、かつては鮮やかな色合いや造形を演出していたであろう佇まいから、単なる農村生活の延長上には無い色めきが、かすかに感じられる。

だが、今見られる鉛温泉は静寂と薄明の支配する場所だ。ましてこの宿の自炊棟の現状はどうしても朽ちた感が否めない。それだ





そのあたりから階段を降り、更に廊下を迂回するとようやく野菜や乾物、生活用品などを売る売店がある。そこではじめて店番のおばあさんに会うのだ。

僕は品物を物色するふりをして他愛もない世間話を持ちかける。退屈で困っているおばあさんにしても、願ったり叶ったりであろう。しばらくそこで時間を過ごした後、今度はようやく一つの半地下へのガラス戸を開け、長い石段を降りる。「立ち湯」という一風変わった、そして燻し銀のような趣きの浴槽に浸かるためである。けれどここでも昼の間はほとんど人と顔を合わせることがない。

こうした侘しいほどの単調さを繰り返すうちに、山間のこの古い宿が醸し出す靈気は

けに華やかな温泉滞在を期待する向きにはきつと耐えられないことだろう。けれど、だからこそ、その朽ちた感じの自炊棟に僕は惹かれたのである。

今回の滞在中で、僕は日常の連綿から放たれ、落ち着きと懐かしさの中でだらしないひとときを過ごしたいと思っただけだ。

それだから、昼も夜もこの宿のあまり人の気配の無い一隅で、台風の大雨で水嵩を増した裏手の川の音を聴きながら布団を延べてゴロゴロした。またそれに飽けば今にも崩れそうな窓辺に寄って煙草に火を付け酒を飲んだ。それからまた時には薄暗い迷路のような廊下に出る。廊下続きには自炊場や洗濯場があるが、そこにも昼間はほとんど人影がない。

知らずのうちに短期滞在の僕にさえ微妙な幻惑をもたらすかにみえる。というのも、こんな宿で一、二ヶ月ぐらいいもグダグダしながら、自分史に関わる禁秘の闇をいつそのことズルズルと引きずり出してみるのはどうだろうか、などといった妄想が頭をもたげ始めてしまうのだから…。

(了)





ぞろの寢。

花が咲いて。

花が かわって。

小さくなってきて。

小さな実が 大きく小さくなってきて

大きな実が 重みで 枝を たわませて

アールヌーボーみたいな曲線に

枝を たわませて

さいごに はちきれ子まで

ずっと みてた。

② 2007 11/19

編集後記 本号では急な依頼であったにもかかわらず、滝川やすをさんが執筆を引き受けて下さいました。次号は年が明けて2月1日発行予定です。たぶんまた遅れます。(斉)



おやすみロバ通巻2号

2007年12月1日

著者 鶴峰まや子 滝川やすを

挿絵 斉藤俊行

発行 工房水銀堂

水銀堂ホームページ <http://suigin.com>

© Mayako Tsurumine 2007

© Toshiyuki Saito 2007